

詩篇96篇

《賛美の号令》

- 1 新しい歌を【主】に歌え。全地よ。【主】に歌え。
- 2 【主】に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。
- 3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。

《主だけが神》

- 4 まことに【主】は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。
- 5 まことに、国々の民の神々はみな、むなしい。しかし【主】は天をお造りになった。
- 6 尊厳と威光は御前にあり、力と光栄は主の聖所にある。

《栄光を主に帰せよ》

- 7 国々の民の諸族よ。【主】にささげよ。栄光と力を【主】にささげよ。
- 8 御名の栄光を【主】にささげよ。ささげ物を携えて、主の大庭に入れ。
- 9 聖なる飾り物を着けて、【主】にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。
- 10 国々の中で言え。「【主】は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもって国々の民をさばく。」

《被造世界の喜び》

- 11 天は喜び、地は、こおどし、海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。
- 12 野とそこにあるものはみな、喜び勇め。そのとき、森の木々もみな、【主】の御前で、喜び歌おう。
- 13 確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。

「王としての神」を謳う詩篇（93～100篇）は尚も続きます。それにしても、本篇は何というスケールの大きさでしょうか。賛美に招かれている対象は、「全地」「国々」「国々の民」「天」「地」「海」「野」「森の木々」と、国家や国民だけでなく被造世界全体に及びます。この壮大な賛美が本当に聞かれる日がやって来るのです。

色を付けたように、1～2節では3回「主に歌え」とあり、7～8節ではそれに対応するかのよう「主にささげよ」が3回繰り返されます。これが目印となって、本篇は1～6節と7～13節と、二つに分けられていると見ることもできます。

1節冒頭に出てくる「新しい歌」ということばから、何とも言えぬ新鮮さが伝わってくるでしょう。私たちが歌っている賛美は、新しく作られたものもあれば、伝統的なものを繰り返し味わうこともあります。いずれも尊い賛美なのであり、その用いられ方において尊重されるべきでしょう。ここで言われている「新しさ」とはむしろ、来る朝ごとにささげる賛美の新鮮さのことが

言われていると思われます。聖書と祈りをもって一日を始めることはふさわしいことですが、そこに賛美が加えられると更に力が増し加わるでしょう。

2～3節の中には、世界に向かって発信すべきメッセージが三つ挙げられています。「御救いの良い知らせ」「主の栄光」「その奇しいわざ」です。まさに「福音」と言い換えてもよい事柄ですが、詩人の念頭にはどうやら、捕囚から解放してくださった主の救いの御業があるようです。イスラエルが何かをしたわけではありません。ただ、神が歴史に働きかけ、山のごとき大国を揺り動かされたのです。救いは神から一方的に民に与えられ、諸国もその不思議な御業を見ました。

4～6節では、創り主、贖い主なる神の偉大さと、取るに足らぬ諸国の偶像とが比較されています。人の手で作られたものの空しさ、無力さ。それは、人間の小さな頭の中で考え出された「神」であって、人間を創造された神に比べうるものではありません。さりとて、その人間ですら宇宙の藻屑であり、神はまさに全宇宙の支配者であられるのです。「尊厳と威光」「力と光栄」はこの方にこそ帰されるべきでしょう。

7～8節の中で3回反復されている「主にささげよ」の「ささげる」(נָחַץ／ヤーハヴ)ということばは、「与える」「もたらす」「据える」「帰する」とも訳すことができます。ここでは「栄光を帰する」という意味に捉えるのがよいでしょう。では、どのような神に対して栄光を帰するのか。10節には、創造主なる神、審き主なる神について語られています。

①まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない (創造主なる神)

②主は公正をもって国々の民をさばく (審き主なる神)

ここで少し立ち止まって、神に栄光を帰するとはどういうことを考えてみたいと思います。反対側からアプローチをしてみると、神に栄光を帰さない生き方というものもあるということになるでしょう。それは、自分を「造られた存在」として認めないことであり、自分の人生、自分の命、自分に付随するあらゆるものを握りしめた状態と言えます。万物は神からの預かり物であるという認識に立つときに、へりくだった人生、自由な人生を構築しようになるのです。このことは、個人レベルにおいても国家レベルにおいても言えることでしょう。

11～13節には、被造世界全体が声を挙げて賛美をささげている情景が描かれています。森のざわめき、海の轟きなど、大自然の怒号は時に人間に恐怖心さえもたらすものです。しかし、耳のある詩人はそこに賛美を聞き取ったのです。大自然が歌っている、叫んでいる！主こそ我らを造られたのだ！と。11節と12節の中で特に際立っていることばは「喜び」でしょう。天地万物が喜び歌う。神と出会えることが嬉しくて、歓喜の叫びを挙げているのです。

被造世界は神と出会うことで、なぜそんなにも喜ぶのでしょうか。その答えは13節にあります。神が正しい審き主、そして贖い主だからです。壊れたものを立て直すことのできるただ一人のお方。被造世界は人間の罪によって今日に至るまで産みの苦しみをしています(ローマ8:22)。この世界の秩序を元通りにしてくださる方と出会える。それが、地上においては礼拝の場なのです。私たちも、この方にあつて本来の自分を取り戻すことができます。私「喜樹」の人生も、この方と共にあつてこそ真に「喜ぶ樹」になると告白いたします。